

令和4年度みどりの食料システム戦略推進交付金のうちグリーンな栽培体系への転換サポート

産地戦略

事業実施主体名： 阿賀野市

都道府県名： 阿賀野市 対象品目： 枝豆

策定年月： 令和5年3月 目標年次： 令和9年

※事業実施計画における目標年度の翌年度から5年目とする。

環境負荷軽減の取組

	化学農薬の使用量低減	○	化学肥料の使用量低減		有機農業の取組面積拡大		温室効果ガスの削減 (水田からのメタンの発生抑制)
	温室効果ガスの削減 (バイオ炭の利用)	○	温室効果ガスの削減 (石油由来資材からの転換)		温室効果ガスの削減 (プラスチック被覆肥料対策)		温室効果ガスの削減 (CO2、N2Oの排出削減)

第1 事業実施地域の現状と目指すべき姿

1 事業実施地域

新潟県阿賀野市（笹神地区）

2 事業実施地域の現状

新潟県阿賀野市笹神地区は、古くから水稲において有機栽培や減農薬による資源循環型・環境保全型農業に取り組んできた産地である。近年は、水稲以外の品目の産地化にも力を入れ、JA新潟かがやき ささかみアグリセンター（旧JAささかみ）は、阿賀野市ブランドえだまめ「えんだま〜縁玉〜」を立ち上げ、産地化に向けた取組を推進している。当地区に根付いている資源循環型・環境保全型農業をえだまめ栽培にも取り入れるため、市内産堆肥を施用しているが、えだまめ栽培の経験不足などから化学農薬・化学肥料に頼らざるを得ないのが現状である。

※1の事業実施地域の現状について、実施しようとしている環境負荷軽減の取組の実施状況等、課題と認識している点について具体的に記載。

3 事業実施地域を目指すべき姿

- ・有機質肥料の施肥を普及させることで、化学肥料に過度に依存しない資源循環型・環境保全型農業をえだまめ栽培にも取り入れる。
- ・生分解性マルチの使用を普及させることで、生産者の作業時間が削減され、地域全体のえだまめの作付面積を拡大させる。

※事業実施地域内へのグリーンな栽培体系の普及により、2に記載した課題がどう改善され、どのような姿になるのかを具体的に記載。

第2 グリーンな栽培体系の普及に向けた取組

1 今後普及すべきグリーンな栽培体系

ア 取り入れる技術

	取り入れる技術	期待される効果
環境にやさしい栽培技術	<ul style="list-style-type: none">市内の新たな有機物資材の施用（卵殻、酒粕）生分解性マルチの使用	<ul style="list-style-type: none">化学肥料の使用量を低減できる可能性がある。 【注意】R4「グリーンな栽培体系への転換サポート」の実証結果を踏まえ、R5に継続実証し、低減の可否を再調査する。
省力化技術	<ul style="list-style-type: none">生分解性マルチの使用	<ul style="list-style-type: none">収穫後のポリエチレンマルチ（以下、ポリマルチ）撤去作業に要する作業時間の削減（4.0h/10a → 0.5h/10a）暑い時期のポリマルチ撤去の重労働から解放されることによる肉体的・精神的負担の軽減。計画に沿った作付け（次作）を行うことができる。

イ 現在の栽培体系

作業時期		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
		上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
項目	作業段階	マルチ張り作業 元肥散布		適期の追肥										栽培暦より
	技術	ポリエチレンマルチの敷設作業					ポリエチレンマルチの人力撤去							

※事業実施地域における現在の一般的な営農体系を記載。
 ※作業時期は作物の栽培期間等に応じて調整可能。



ウ グリーンな栽培体系

作業時期		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
		上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
項目	作業段階	マルチ張り作業 元肥散布		適期の追肥										【注意】R4「グリーンな栽培体系への転換サポート」の実証結果を踏まえ、R5に継続実証し、化成肥料を有機質肥料に代替できるか可否を調査する。
	環境にやさしい栽培技術	有機質肥料(酒粕、卵殻)		6-7葉期に有機質肥										
項目	省力化技術	生分解性マルチの敷設作業					生分解性マルチを トラクターですき込む							

※アで記載した「環境にやさしい栽培技術」及び「省力化技術」が、栽培体系のどの工程に取り入れられるのが明確に記載。

2 新たな栽培体系の普及に向けた目標

ア 環境負荷軽減の目標

指標		年度	R4 (現状値)	R9 (目標値)	増減率 (%)	備考
1	ポリエチレンマルチの削減		5.8	0	—	現状値 (R4) : ポリエチレンマルチを使用した面積 5.8ha
	単位	ha				
2	生分解性マルチの使用		1	16	1500%	現状値 (R4) : 生分解性マルチを使用した面積 9,991m ² (≒1ha)
	単位	ha				
3	化学肥料の使用量の低減		40	20	▲50.0%	現状値 : 栽培暦より。(NK化成20kg/10a×2回→1回) 【注意】R4「グリーンな栽培体系への転換サポート」の実証結果を踏まえ、R5に継続実証し、低減の可否を調査する。
	単位	kg/10a				

イ 省力化目標

指標		年度	R4 (現状値)	R9 (目標年次)	増減率 (%)	備考
1	収穫後のマルチ撤去作業に要する作業時間の削減		4.0 h / 10a	0.5 h / 10a	▲87.5%	現状値 ①茎葉の除去1.0h (実測) + 人力撤去2.2h (実測) + 回収時間0.8h = 4.0 h / 10a ②『生分解性マルチの活用事例』(H31.2農林水産省生産局)より、半日から1日必要。 (1名人力撤去→トラクターすき込み)
	単位	h/10a				

ウ 普及を目指す面積

(単位 : ha)

指標		年度	R4 (現状値)	R9 (目標値)	増減率 (%)	備考
対象品目全体の作付面積			18.25	30	64%	
うち、グリーンな栽培体系に取り組む面積			1	16	1500%	現状値 (R4) : 生分解性マルチを使用した面積 9,991㎡ (≒1ha)
普及割合			5%	53%		

第3 関係者の役割分担及び取組内容

構 成 員	役割分担及び取組内容				
	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度 (目標年次)
新潟県 (新発田農業普及指導センター)	・技術指導、ほ場巡回	・技術指導、ほ場巡回	・技術指導、ほ場巡回	・技術指導、ほ場巡回	・技術指導、ほ場巡回
JA新潟かがやき ささかみアグリセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・生分解性マルチへの切り替えサポート ・有機物資材（酒粕）の施用に関する実証継続（収量・食味調査） ・技術指導、ほ場巡回 ・情報発信 ・栽培暦の見直し検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術指導、ほ場巡回 ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術指導、ほ場巡回 ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術指導、ほ場巡回 ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術指導、ほ場巡回 ・情報発信
新潟食料農業大学 (研究・分析機関)	<ul style="list-style-type: none"> ・食味分析 ・土壌分析 ・分析結果に対する助言 	—	—	—	—
阿賀野市 農林課	<ul style="list-style-type: none"> ・産地戦略の進捗管理 ・有機物資材（酒粕）の施用に関する実証継続（収量・食味調査） ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・産地戦略の進捗管理 ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・産地戦略の進捗管理 ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・産地戦略の進捗管理 ・情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・産地戦略の進捗管理 ・情報発信